

取材*鍵井 靖章
協力*JTDN

Japan

Thailand

バンコク
カオラック
プーケット
アンダマン海

素顔

津波から 2ヶ月後の取材

津波後のスマラン諸島、プーケット
カオラックを取材して



スマランNo.8の دونالدダックベイから見下ろす

アンダマン海の



地元の小学生が描いた絵。
上下する2枚の絵の時系列には
どのような意味があるのだろうか？



バトンビーチでの
写生大会は学校行事だった。



夕暮れ的时间を迎えるバトンビーチ

アンダマン海クルーズでの
主要なポイントが集約するスマラン諸島。
バラエティーに富んだポイントと
インド洋とアンダマン海固有の魚が混在した
稀有な海として人気を誇っている。
津波から約2ヶ月が経過した現在、
海の様子はどのようになっているのか？
実際に現地へ赴き取材、
撮影を行ってきた。

Photo&Text
Kagii Yasuaki

エントリー直後、スマランの海でいちばん最初の迎えてくれたのはこのイエローバックフジユラーの群れだった



典型的なスマラン諸島の海の風景。豊かなサンゴ・腔腸類と青い海



透明度の高い海中で、ダイバーを飛んでいるよう(上)
巨石の間をくぐる。冒険的なダイビングも楽しめる(右)



津波から約2ヶ月後の スマラン諸島でのダイビング

今回はクルーズ船に乗船し、スマラン諸島の数箇所のポイントに潜ってきたが、以前とほとんど変わらないアンダマン海の広がっていた。確かに今回の津波で影響を受けた箇所もあったが、「それは全体の約10～20%の部分に過ぎない」と、現地のガイドさんが教えてくれた。数字にするのは難しいかもしれないが、確かに、報道されていた陸上の被害とは比較にならないほど、海の中は平静を保っていた。

スマラン諸島に到着後、1本目のダイビングポイントはAnita's Reef(アニタズ リーフ)。もともと、津波の影響がほとんどないとブリーフィングを受けて潜ったポイント。エントリー直後からイエローバック フジユラーの大群に囲まれた。この魚はインド洋の固有種でとても人気があり、黄色い背を持った姿は、青く透き通った海にとても映える。その魚群に誘われるように、リーフ沿いを進んでいくと、豊かに実ったソフトコーラルやハードコーラルの群生が現れた。津波以前にも、このポイントに潜ったことがあったが、何も変わらず、記憶のままの姿だった。スマランらしい華やかな海中景観が健在であることが嬉しくて、カメラ片手に見覚えのある根の周囲を何度も巡っては撮

影を続けた。

そして、ダイナミックな地形ポイントして人気の高いエレファントロックも、以前とほとんど様子を違えていなかった。地元のガイドさんはソフトコーラルが少し減ったと教えてくれたが、ファンダイバーの私たちには、その違いがわからない。もともと、地形を楽しむポイントで、岩と岩が重なり合うことでできたトンネルを潜ったり、水面まで突き出た大きな奇岩を見上げたりして、このポイントに親しんできた。今回、潜ってみて、私などには津波が表面をなぞった巨石ポイントとしてしか、認識することができなかった。むしろ、同じ地形ポイントであるディープシックスというポイントは、津波によって流れ出た砂、瓦礫によって、巨石がよりそそり立ち、ダイナミックさが更に強調されたように思う。そのようなポイントは考え方によっては、ダイバーだから見ることのできる今回の津波跡で、自然のもつパワーに畏敬の念を覚える。

**アンダマン海の
素顔 津波から
2ヶ月後の取材**



白い砂地に広がる美しいサンゴ礁。その上を泳ぐだけで気分は上々

津波の影響があったポイントも存在する

スマラン諸島のポイントの特徴として、西側はダイナミックな巨石が連なる地形のポイント。東側は見事なサンゴ礁やソフトコーラルがリーフを覆う癒し系のポイントとなっている。津波は西南の方向から押し寄せた。被害を受けたのは、島の西南と北に位置するポイントが多い。島と島の狭い海峡を津波が通過する時、勢力が増した水流が、サンゴやイソバナなどを襲った。クリスマスポイントなどの最も被害を受けたポイントは保護のために現在、クローズしている。

前述したよう島の西側は巨石が連なる地形が多く、東側のサンゴのエリアほどは、津波の影響を受け難いと思われる。津波の多くは海中に鎮座する枕根のような巨石の上を流れていった。

島の周囲に多くダイビングポイントを持つスマラン諸島では、潜るに値するダイビングポイントを津波

で失ったわけでは決していない。例えば、スマラン諸島を含む、4泊5日のアンダマン海クルーズで、津波の影響のなかったポイントだけを選択して、ダイビングスケジュールを組むことも可能だと現地ガイドさんは静かに教えてくれた。

憧れの「イースト・オブ・エデン」

ダイバーに人気の高いポイントでもある「イースト・オブ・エデン」にもエントリーしてきた。こちらも相変わらず、美しいポイントだった。浅瀬に点在する枝サンゴは、白い砂地に自由に広がり、青いデバスズメダイは、まるで音を奏でるかのようサンゴ上で踊る。新しいサンゴの群生に幼魚たちが集う様子は海の中に生命が溢れている、そんな印象を得る。

トップリーフにあるいくつかの根にはカラフルな

ソフトコーラルが一面を覆い、様々な種類の魚たち棲み家としている。時折、隙間に隠れるスカシテンジクダイを狙ってカスマアジが突入すると、スカシテンジクダイが反転するカスマアジに合わせて、まるでフライパンの中で踊るチャーハンのように逃げる。また、海のお掃除屋さんのようなマルクチヒメジが集団で根の廻りを行進しながら通り過ぎていく。それは、一瞬の出来事だが、インパクトが強いのでひどく心に残る。真昼の饗宴にも見えるのその様子は、食うか食われるかの日常、自然界の厳しい現実……、私たちはそんな世界と隣合わせすることができる。

アンダマン海の素顔 津波から2ヶ月後の取材



サンゴの新しい生命を見つけた。小さいが逞しい(色) 被害を受けたサンゴの上を泳ぐヘナナムロの仲間(上)





ラチャノイ島での一コマ。海岸線の海の青さには驚かされる



(↑上から)スカテンジクダイの群れは、まるで銀河のよう(コタチャイ、2003年撮影)(中)マクロの世界もカラフル(ラチャノイ)
(下)キレイな色のウミウシもたくさん見つかる(ラチャノイ)

アンダマン海の素顔 津波から2ヶ月後の取材

もちろん、今年もマンタがコボン、コタチャイで出現しているし、ダイバーが少なくなったためか、リチュウリュウロックでジンベイザメ目撃の情報も続々と入ってきている。

プーケットのローカルポイントでのダイビング

今回、4泊5日の日程でスマラン諸島のクルーズに乗船した。諸々の理由で初日のダイビングは、プーケットのローカルポイントで日帰りダイビングのエリアであるラチャノイ(Racha Noi)とラチャヤイ(Racha Yai)の2箇所合計3本のダイビングを行った。

最初の2ダイブはラチャノイ島の被害があったと見られる西側を中心に潜ったが、正直、ほとんど津波の影響があったと考えられる箇所はなく、健全なリーフが広がっていた。いくつもあるテーブルサンゴも健在で、崩れている様子は見当たらなかった。

ラチャヤイ島は、リゾートが内湾に面していて、津波時には、そのリゾートからのゴミが流出したが、もうすでに海底清掃が済んでいた。今回は新たな調査として隣接したポイントに潜ったが、こちらも津波の影響を見受けることはなかった。

ローカルポイントへの日帰りダイビングをメインに行っているダイビングサービスの方の話では、「今回、潜ったラチャノイ島の西側は、あまり使用しないダイビングポイントです。主なポイントは島の東側にあるため、津波に対するダイビングの影響はほとんどない」と話してくれた。また、プーケット沖で観測された津波の高さは4mと、他のエリアに比べてもそれほど大きなものではなく、ローカルポイントへの影響は小さいようだ。

今回は、スマラン諸島だけを潜ってきたが、その北に位置する人気のコボン、コタチャイ、リチュウリュウロックの状態も気になる。津波後に潜った現地のガイドさんの話によると、コボン、リチュウリュウロックは津波による被害がほとんどないとのこと。また、コタチャイに関してはサンゴがダメージを受けた箇所もあるが、コタチャイでのダイビングスタイル自体がマンタなどの大物やフエージュラー系の魚群に襲い掛かるロウニン、カスミアジなどのウォッチングがメインとなるため、ダイビングの楽しみ方については問題がないようだ。

気になるマンタ&ジンベイザメ



アンダマン海の
素顔 津波から
2ヶ月後の取材



カタビーチでは、ビーチエントリーするダイバーの姿も(上)
パトンビーチ2月15日2005年、現在(左)

そこには記憶のままのパトンビーチが存在していた。
以前の面影がない場所など見つからなかった。



賑わいをみせるカロンビーチ。ヨーロッパからのゲストが日光浴を楽しむ

ヨーロッパ人で溢れるパトンビーチの日常

今回、ブーケットの中でも一番多くの被害が報告されたパトンビーチに向かった。車から降り海岸線を端から端まで歩いてみると、以前と変わらない名物のカラフルなパラソルがまるで青い空と青い海の境界線のように力強く伸びていた。見受けられるゲストのほとんどがヨーロッパ人。それぞれのバカンスを楽しむように泳いだり、マッサージを受けたり、読書などに興じている。カタ、カロンビーチでもよく見かけたが、子連れのお母さんも楽しそうに寝そべっている。あれから

約2ヶ月しか経っていないのにパトンビーチはまるで平静を取り戻していた。

海岸通りに面したお店のいくつかは、被災の跡が残る店舗もあるが、通常に営業している店が多い。滞在中もカタダイビングサービスの増子さん、「今日はあの店(某有名コーヒーチェーン店)が、オープンしてたね」と教えてくれた。メインストリートでもあるバングラー通りも以前と変わっていない。今晚、また出直すのだが以前のような雑多な雰囲気に紛れて撮影ができそうだ。

ほぼ毎年、昼食に出向いている海岸線沿いのローカルレストランがある。被災後に放映されたVTRのなかに、そのお店が被害にあっている映像を見つけて気に掛けていた。少し緊張しながらも、そのお店まで急ぎ足で向かったが、なんとたくさんの人で賑わっていた。普段と変わらない様子でお皿に料理を盛り付けるおばさんの顔を眺めながら、人の強さってなんだろうって考える。

ほぼ中央に位置する公園で小学生たちが写生大会を行っていた。様々な思い出で描かれたお絵かきが、木製のパネルに張り出されていた。少し足を止めて、

そのうちの気になった数枚を撮影した。

彼らの視線の先にあった今回の出来事。あの時と現在の様子が1枚の画用紙に描かれているものがあった。

その後、昼食をとり、シャロンベイに向かう。多くのクルーズ船やデイトリップのボートが発着する港がある。頑丈に作られた桟橋以前と変わらず真っ直ぐ水平線まで伸びていた。

2月15日2005年、現在。例年に比べるとやはり人が少ないが、パトン、カロン、カタビーチは以前とまるで変わらない様子だった。以前のような賑やかで楽しいビーチに戻るのも時間だけの問題のようだ。



パトンビーチの海岸線の大通り。みんな忙しく行動している(上)
ネオン街のバングラー通り。昨年と何も変わっていない(下)



高台からカオラックの海岸線を望む、津波の跡が窺える

「みんなに愛されたカオラックの町が、またたくさんのダイバーで賑わうその日はそれほど遠くない」と確信した



大通りの中央にある「SKYBAR」前の広場。夕暮れ時から若者で賑わう



カオラック メルリン リゾート



クラトム カオラックリゾート



アンダブリ リゾート



カオラックリゾート

カオラックの現在と未来

プーケットでの取材翌日、カオラックへと向かった。国道4号線を北上すること、約2時間。小高い丘を通り抜けると、カオラックの町並みが見えはじめる。左手には大きく開拓されたような場所が広がり、海を一望できる光景に驚いた。以前はリゾートがいくつも連なり、海を望むことなど出来なかった。すでに清掃が終えられているため流木やゴミなどは見かけないが、津波の影響の大きさを実感する。

町のメインストリートの差し掛かる手前で引率してくれたビッグブルーの大村健さんが、「TVで放映されるのはここまでなんです」と教えてくれた。最も被害が顕著に表れている場所だけがクローズアップされている…。

確かに、カオラックにはビーチフロントのリゾートが多かったため、被害が大きかった。しかし、今、それらのリゾートは、来年のシーズンに向けて再建設を行っている。もちろん、リゾートによって、そのスピードは様々だが、確実に復興に向かっていく。世界から寄せられた義捐金なども、地域密着型のボランティア団体を中心に、目に見える復興に役立てられている。海岸線の清掃、土の購入、芝生を張り、そしてヤシやバナナの木を植える。人間と自然がただ共存できる海岸線を再構築している。

少し、高台になったメインストリートの先は、以前に訪れたままの建物が軒を連ねていた。その中でも去年、ダイビング雑誌の取材で気に入って撮影していた

「SKY BAR」というオープンバーがある。そのオープンテラスに座り、お茶を飲んでいる限りは、津波の形跡は全く見当たらない。日が暮れ始めると、ライトアップされ、現在はボランティアで来た若者たちで賑わっている。

カオラックで経営するダイビングセンターのオーナーおふたりの会話を聞いた。「今年(2005年)のシーズンは、このカオラックでゲストを迎え入れることは出来なかったけれど、来シーズンから、きっとみんな戻って来てくれると信じています。理由のひとつにしてくれるゲストの方は、「カオラック」という町自体をとっても好きだということです。これは一度訪れたことのあるゲストに限られるかもしれないが、これまで3度もこの町に訪問している私にはその言葉が少し理解できた。カオラックという町が持っている魅力。都会の喧騒から離れ、「隠れ家」とよく形容された落ち着いた雰囲気のリゾート地。それはタイの中でも稀な存在で、リゾート地として全体のバランスも良く、ここでの滞在はひとつのスタイル、ブランドとして確立されていた。ここ数年のカオラック人気をみると、確かに納得できる理由がある。

滞在中、様々な方に会い、その活動ぶりを聞いていた。地元の人たちは今、自らの力で復興に取り組んでいる。それは豪華なリゾートを新設するのではなく、以前のようなナチュラルなリゾート地に再興するため。来シーズンに向けて、カオラックの町は着実に歩んでいる。

来シーズンに注目のリゾート

カオラックリゾート Khaolak Resort

原始林を利用し、自然と調和した落ち着いた感じのリゾート。スパ施設も人気。小高い丘に人気のバスツアーの客室が並ぶ。

クラトム カオラックリゾート Krathom Khaolak Resort

カオラックのメイン道路から少し中に入った静かで小綺麗なガーデンバンガロー。レストラン、クリニック、人気の高いファンキーゲッコーバーなどあり。

アンダブリリゾート Andaburi Resort

カオラックの街中に位置し、ショッピングや食事などにとっても便利な立地。敷地内は緑で囲まれ、プールを中心にバンガローが建ち並ぶ。先シーズンオープンしたばかりの新しいリゾート。

カオラック メルリンリゾート Khaolak Merin Resort

'03年12月にオープンしたデラックスリゾート。ナチュラルで広々とした敷地内には4つのプールがある。客室はシックで落ち着いた雰囲気。リラクゼーションルームやスパなどの施設も豪華。



ボランティア活動での水中作業。折れたイソバナを固定する



作業の手順の説明を聞くボランティアダイバーの皆さん(上)
ダイビング後、集めたデータを集積する(下)

アンダマン海の 素顔 津波から 2ヶ月後の取材

今回は、タイのダイビングサービス関係者で組織されたJTDNという団体が主催するボランティアクルーズ船に乗船し、4泊5日のクルーズ(2発17~21日)に参加してきた。メンバーは地元のガイドインストラクター(17名)、日本、タイ国内からの日本人ボランティアダイバー(10名)、国立公園のスタッフ(2名)を含む合計29名。今回の目的は、これまで4回行ったサンゴなどの修復作業の追跡調査だった。

JTDN主催のボランティアクルーズ

今回のクルーズに参加したゲストの声



今回のボランティアクルーズに参加したダイバーの記念写真



蘭頭宏治 (そのがしらこうじ)さん (千葉県 大学生)

日本で見たニュースなどでは津波の被害にあっている映像ばかりが流れ、ダイビングの友人からは、もうサンゴはぐちゃぐちゃで大変だと聞いていました。実際のこのクルーズに参加して潜ってみると、自分が想像していたよりは全然被害が少ないことを知りました。津波でサンゴがやられているという前提でやってきたので、ここここが被害を受けてると感じますが、色メガネなしで潜れば、傷ついた場所はほとんどわからないと思います。何本か潜った後、作業以外は普通に楽しめました。スマランの海は魚影も濃く、ファンダイブがすごく楽しめる海だと思いました。この数日間とはとても思い出に残るダイビングとなりました。



山崎 知英子 (やまざき ちえこ)さん(東京都 OL)

スマラン諸島の海はとてもカラフルでした。全体的に赤やオレンジ色の印象が強く、それはソフトコーラルやイソバナの色彩によるものだと思います。透明度も良いので、よりはっきり見えましたから。今回は初のスマランクルーズだったのですが、ボランティア船ということでもっとクリーニングの作業が多いのかと思いましたが、海自体も楽しむことができました。実際、以前に潜った方は、ウミウチワなどもっとたくさん目にしたかと思いますが、サンゴが死んでいるわけではなく、とても良い海でした。魚の種類も多く、マクロから大物まで何でも楽しむことができる海だと思いました。



今回のボランティアクルーズに参加したJTDNのメンバーを含む地元タイで活動するダイビングスタッフの皆さん

アンダマン海の 素顔 津波から 2ヶ月後の取材

歴史の中で津波は何回あったのだろうか？
今回はそこに文明があり、人がいた、建築物があった……
被害を受けた。

人は多くのものを失い、嘆き、悲しみ、苦しんだ。
生きるという事は残酷で、ゆっくりと悲しみに浸る時間すら与えてくれない。がむしゃらに生き続ける事によって悲しみと戦った。『一刻も早くもとの状態に戻りたい……』我々もそのうちの一人であった。復興に向け陸上には多くの支援団体がいた。
水中は？サンゴを助ける事が我々の恩返しなのでは……
そう、思い立って動いた。声をかけるとタイ国、世界中のダイバーが集まり、時には100名を越す有志や海洋学者が来てくれた。

水中での作業は困難だった。減圧症のリスクと戦い、

繊細なサンゴ達を治すのは想像を絶するものだった。プロジェクトを終了した時には多くの仲間との強い絆を感じられた。『やってよかった。辛かったけど、仲間が出来た』皆、そう思った。その後も定期的に水中調査に入る。誰がサンゴは繊細な生き物と言ったのだろうか？なんてたくましく、力強い生き物ではないか！？

既に折れた箇所は、成長を始め、転げ落ちた場所が新しい住処となって、生き生きと仲間を増やしているじゃないか！？ 目からウロコと涙がこぼれる……
僕らは広大なエリアのサンゴのケアを行った。でも、実は海の中のちっぽけな部分だった事に後から気づいた。自然の仕組みの中で、僕はおこがましい事をしてしまったのだろうか……？

JTDN代表者 宮谷内 泰志郎



作業について、スライドを使用した説明がある



水中作業はとても大変で減圧症のリスクも考えなくてはならない

サンゴを助ける事が我々の恩返しなのでは……
そう思い立って動いた

JTDN(JAPAN THAILAND DIVING NETWORK)のこと

JTDNは、タイ王国で活動する日系ダイビングオペレーター主導のもと、サンゴなど自然の資源の保全とダイビングの質的向上と安全性の向上を目的に設立された団体である。現在は8社にて運営されている。

報告書に基づき、サンゴ復旧プロジェクト実施。
タイ政府及びDOCTなどによる呼びかけで水中クリーンアップ開始。
伝染病風評被害に対する日本テレビへの取材対応。

活動内容

- 2004年04月
水中造詣センター主催マリンフェアにて、TATブースへの共同出展(6社)及び第一回、冊子の作成。
- 2005年01月
スマトラ沖地震後、タイ政府水中調査へのボランティア協力。
報告書(原語:タイ語)の和訳と各方面への発表。

- 参加社** (アイウエオ順)
- アクアランド
 - カタダイビングサービス
 - サムイダイビングサービス
 - ダイブアジア
 - ビッグブルー
 - ブッダビューリゾート
 - マリンクエストダイバーズ
 - マリンプロジェクト

各担当責任者

- 代表者*宮谷内 泰志郎 (ミヤヤウチタイシロウ)
- 副代表者*増子 均 (マスコヒトシ)
- 会計担当*長井 陽介 (ナガイヨウスケ)

団体ブログ

<http://jtdnet.exblog.jp/>
E-mail jtdn@hotmail.co.jp

JAPAN THAILAND DIVING NETWORK

ブーケット連絡事務所(ダイブアジア内)
24 Karon Rd.,Kata Beach P.O.Box 70,
Phuket 83100,Thailand